〔学術講演〕

教 育 と 宗 教

上　田　閑　照

「教育と宗教」という題でお話をさせていただきたいと思います。1年ほど前に「宗教と教育」というテーマの新聞の記事がありました。朝日新聞の宗教欄でしたが、どういう問題かということをまず簡単にご紹介しておきたいと思います。

北陸のある学校で、── それはその学校だけではなくて、たくさんの学校、小学校、中学校で行われているのかもしれません。給食の時間に料理が並ぶと、「合掌」と日直が号令を掛けます。全員が「いただきます」と。そして、にぎやかな食事が終わると、また「合掌」の合図があってみなで「ごちそうさま」。

ところがある父兄の人が、合掌というのは仏教の礼拝であって学校で合掌をさせるのは憲法違反ではないのか、と学校を批判したんです。それで学校のほうは困ってしまって、2回の職員会議で話し合って、いろんな意見が出たというのです。

例えば、合掌というのは宗教ではなくて単なる慣習であると。続けるべきだ。そういう意見もあるし、それからまた価値観が多様化している時代だから、異論が出た以上はやめたほうがいいと、そういう意見もあったり。あるいは、これは決して特定の宗教の問題ではなくて、大いなるものへの感謝を表す普遍的な仕方である。しつけとしても大事であってやめる必要はない。そういうさまざまな意見があったのですが、結局、その学校ではやめるということになったということです。県の指導課でも、これはそれぞれの学校で決めるべきだとして、逃げた形になりました。

そういうことがあって、そして、それが報道されて以来、やめる学校が次第に増えてきたということです。

この記事に私が非常に関心を持ちましたのは、結局やめたという、その事実があったということ。やめたきっかけは憲法違反ではないかという批判でした。それに対して、価値観が多様化している時代なので、とにかく異論が出た以上はやめるべきである、そういう意見が大勢を占めたわけです。そして、その思想的な根拠としては、思想の自由、あるいは信条の自由があげられました。学校を批判した父兄の人は、神仏を認めない、宗教を持たない、そういう立場を表明した人らしいんですが、そういう立場の人がいる以上、合掌させることは思想信条の自由を侵すことになるんじゃあないかと、そういうような趣旨でとにかくやめにしたということですが、ほかの学校もだんだんやめ始めたということです。

ここにどういう問題があるか、私には非常に気になりました。一つの問題はやめた理由です。ある父兄が特定の宗教教育になるからやめるべきであるという批判をした。それに対して、価

値観が多様化している時代であるから、その父兄の考えを認めて、合掌はやめたほうがいいという、私はこの考え方には賛成できません。

なぜかというと、価値観の多様化ということとどうでもいいということとは質的に違うと思います。共通に問題になる場合には、やはり少なくともどうであるべきかという議論をなすべきだと思います。そういう議論がなくて価値観の多様性ということだけを基礎にすると、結局はどういう考えでもいいということになり、人間自身のあり方を次第に空洞化することになると思います。

それから、神仏を認めない、宗教を持たないという、つまり無宗教の人が居る場合、いただきますと合掌させることは、無宗教であるという思想の自由を侵すことになりはしないか、という批判に対しても、先ずよく議論する必要があります。議論なしに、一人でも反対の人が居るからといって、皆が合掌することをやめさせるならば、それは無宗教の思想が全体を支配する結果になるわけです。そしてこれは一種のマイナスの宗教教育に事実なってしまうということです。ここのところはなかなか難しいところなので、よく考える必要があると思います。

例えばある人が「私は無道徳だ」と。「無道徳の思想である。無道徳によって生きるという、そういう立場である」と、こういう人の子供が居る学校で、では道徳を教えることはできないということになったらおかしなことになります。共同体が成立しなくなります。

価値観の多様性自体が優先的に大切なのではなく、人間にとって共通の問題になることに関しては、どうであるべきであるかということを一緒に議論する必要が出てきます。

食事の時の「いただきます」、合掌についてそこの県の指導課では最終的には「合掌を合図として強制するっていうのはよくない。だから、それはやめたほうがいい。だけれども感謝の心は育ててもらいたい」ということだったそうです。

これは一種の責任逃れの感じがします。感謝の心を育てるということは、どういうことか。感謝の心を持ちさえすればいいというのではなくて、やはり形にあらわして、心が養われるわけです。

魚を食べるにしても、生きているものの命をもらうということですから、それだけの自覚がなければならないと思います。魚はスーパーに売っている食品ではないのです。もともと生き物として海に生きている生き物です。食べるというのは、その命をもらうことです。それだけではなく、漁業のことを考えてみますと、北洋の漁業、毎年のように相当の遭難が実際あるわけです。天地の恵みと人々の労苦がこめられて目の前に食べ物として現れているのですから、その全体を「いただきます」という気持ちで、おのずから合掌して、いただくわけです。「合掌」と当番が声をかけるのは、命令ではなくて、合図です。

これは人間としてそうあるべきであると私には思われます。合掌を特定の宗教的行為と考える必要はないと思います。

義務教育の過程である小学校や中学校で、食事の時にキリスト教の「天にましますわれらの

父よ」とか仏教の「食事五観」を唱えさせるというのではなく、合掌して「いただきます」までも宗教的としてさせないようにすると、その結果は人間としての空洞化をひきおこすでしょう。そういう結果を私自身経験したことがあります。京大の学内食堂で食べていると、一人の学生がわたしの前に座りました。お盆に一杯のご馳走をのっけています。私の学生のころとは違って、非常にぜいたくな食事です。食べ始めようとして何か探している様子です。ソースを探しているようなので、私の近くにあったソース瓶を彼の方に押してやったのですが、彼は一言のお礼も言わず、お礼の様子を示すこともなく、ソースをふりかけて食べ始めました。私はそのとき何ともいえない感じがしました。人間というのは、そういうようであってはならないと思います。もう一つ例をあげます。わたしは比叡平に住んでいて、町へのバスは１時間に１本なので乗り遅れると大変なんです。運転手は一々遅れてくる人を待っていることもできませんから、時間になったら出るわけなんですが、それでもシチュエーションによっては、何らかの配慮を運転手さんはするわけですね。ある時、動きだしたそのときに中学生ぐらいの子どもが向こうからドンドン走ってきて手をあげて、つまり「待ってくれ」と言っているわけなんです。それでどうするかなと見ていましたら、運転手は走りかけたところを止めて待ってやったんです。

しばらくして後ろから乗ってきました。私はそのとき当然、ありがとうございましたとか何とか言うと思ったんですが、全然言わないで乗りこみました。わたしの近くに来たら、ありがとうと言いなさい、と言ってやろうと思ったんですが、彼は一番後ろのほうにスッと坐って、それきりです。こういうこともおかしいことと思います。その場に居る大人がきちんと教えるべきことだと思います。人間同士ということで、人間はどうあるべきかということをきちんと伝えていく。そして子供の方は、人間であることを学んでいく。そこに宗教と教育、ないしは教育と宗教ということの素朴であるけれども、もっとも大切な基礎があると思います。

そういう基礎がなくなって心が空洞化していくとどういうことになるか、その実例の一つを大江健三郎さんが最近の新聞に記事を書いています。大略を紹介してみます。「テレビの討論番組で『どうして人を殺してはいけないのか』と若者が問い掛け、同席した知識人たちは直接には答えなかった。私［大江］はむしろ、この質問に問題があると思う。まともな子どもならば、そういう問いを口にすることを恥じるものだ。なぜなら性格の良しあしとか、頭の鋭さとは無関係に子どもは幼いなりに固有の誇りを持っているから、……」というのです。

「子どもは幼いなりに固有の誇りがあって、そういう問いを問うこと自身を恥じるものである。人を殺さないということ自体に意味がある。『どうして』と問うのはその自然な直感に逆らうことだと子どもは感じている。そして、人生の月日を重ねることは最初の直感……、これは殺してはいけないというそういう直感を経験によって充実させていくこと」だと。この限りでは私も大江さんに同感です。

子供が人間として育てられないで、人間であることを学ばないで、心が空洞化してゆくと、

単なる空白とか、空洞ではすまないんです。そこに一種の狂い、存在の狂いとしかいいようがない事態が起こってきます。「教育と宗教」という本題に入る準備ができたと思います。核心は、人間にとって何が一番大切かという問題です。

教育ということも、宗教ということも人間にとって大切なことです。しかし、大切なこととはどういうことか。必要なことというだけではない。また重要なことというのでもない。もっと大切なことという感じがします。人間にとって大切なことというのは、それがなければ人間が人間でなくなるようなことです。日本語で大切なということというのは、それだけの重たい意味を持っています。それでは、そういう意味で人間にとって大切なもの、それは何かということになります。

人類の歴史の中でこれが人間にとって一番大切だということ、これはいろいろな徳も含んであげられてきました。例えば愛が大切であると言われた場合もあります。あるいは誠実が大切とか。あるいは、時代や国家の方向に沿って、消費とか忠君愛国とか。あるいは一々言葉で言わなくても自分の生活でお金が大切だと思って生きている人も少なくないでしょう。

何が大切だとされたかということは、そのように内容的にはそれぞれ違っていますけれども、どうしてそれが大切なのか、ということになりますと、やはり、それがなければ人間が人間でなくなるという、そういうところまでつきつめてゆかなければなりません。

どうして、人間であるのに、人間であることがなくなるということがあり得るのかということですが、例えば猫が猫でなくなるということはあり得ないと思われます。ところが人間の場合には、人間のあり方そのものの中に、本当に人間であるかどうか、人間として本当に生きているかどうかが問題になるところがあります。昔の言葉だと「人でなし」だとか、あるいは「人非人」という言葉があります。人間が自分で人間でなくなっていく。人間に反した非人間的なあり方をする、そういうことが人間のあり方そのものに含まれているわけです。そこに人間の独特な存在があらわれています。一方では人間は「万物の霊長」と言われてきました。しかもまさに霊長であるゆえんを逆に使って万物を苦しめるとか、いわゆる自然破壊にしても生態系の問題にしても、人間のやり方の中には自分自身のあり方をゆがめ、しかも単に自分だけの問題にとどまらず、共に生きているものたちをゆがめていく、苦しめてゆく。そういうあり方が人間の中にあるわけです。人間であるということは、改めて本当の人間になるという、そういう課題がそこに含まれているということです。そして、改めて人間になるということは、人間とはこういうものだ、こうでなければならないという人間の本来についての見識がなければなりません。

このようにして、人間にとって最も大切なことは、まさに人間であるというそのことだということになります。そこで人間であるということがそもそもどういうことであるかという問題になります。人間とは一体何であるか。それを実現することが人間であるようなそういう人間、それはどういうものであるか。

そのとき、人間とは何であるかと人間自身が問うているわけですが、そこに実は最初の答えの萌芽が既に出ていると言えます。それはどういうことかといいますと、人間が自分で人間とは何かと問うているわけですから、人間とは、人間とはなんであるかを問う存在であるということになります。即ち人間とは自分自身を問題にする自己意識的な存在ということです。

ところで自己意識の一番原理的な形式は「我は我なり」、こういうことです。「我は我なり」、これは如何にも単純で何でもないようなことですが、これは実は大変なことです。人間のあらゆる問題はそこに根をもっているということができると思います。自己意識の形式は「我は我なり」ということです。これが人間独特の基本的なあり方なんですが、そのあり方に、よくなる場合もあれば、悪くなる場合もある、という根本的な両義性があります。

「我は我なり」ということが自意識を強めるような「おれはおれ」だ、というように自分自身を押し出す、そういうあり方になる場合があります。これは仏教でいう「我」── 仏教は我という字を同時に「が」と読みます。「が」と読むときには「我が強い」とか、そういう「我」です。自分自身にとらわれて、しかも単にとらわれるだけではなくて、自分にとらわれた自分を強く押しだそうとする我意、我執の我です。「我は我なり」、これは既に自己認識ですから、自分が見られているわけですが、見られた自分につかみかかって、自分自身を抱きしめていこうとするような一種のナルシシズムを本質する、そういうあり方が一方にあります。

しかし、他方、同時にそういうあり方をはっきり切り開いて、「我は、我なり」というように自分を開いていく、そういうあり方でもあります。自意識の「我は我なり」の一直線的な押し出し方と反対に、開かれた「我は、我なり」です。「我・我・我」と自分に粘りついているのではなく、「我と我」の間が切り開かれていると言えます。自分が大きくゆったりと開かれている。イメージ的に言えば、「我は」と言って、そこで大きく深呼吸をして「我」を忘れ、そしてあらためて「我なり」。そのようにして「我と我」の間に切れ目が入れられ、その切れ目が大きな空間に通じている。そのような「我」のあり方です。

このようにして我に閉じこもった我が否定されて、我と我との間に風穴のように空間が開かれると、そこが他者と共にあり物事とがかかわるそういう開けた場所になります。「自意識」の「我は我」に対して、この開かれた「我は、我」は「自覚」というあり方になります。自意識というのはどこまでも自分が関心の的です。自意識の「我」は他者に対して自分をより高く、より大きく示そうとします。それに対して自覚というのは、共に居る場所に開かれて、そして、その場所の開けから照らされて自分のあり方が見えてくる、そういうあり方です。「父親としての自覚」というような言い方が日常語でされるわけですが、それは家庭という場に自分が開かれて、そして、家庭の中で自分のあるべき位置が示されて、はたしてその位置にふさわしいあり方をしているかどうかという、そういう反省、自己反省まで含んだあり方です。

以上、「我は我なり」という自己意識はニュートラルに妥当する自己判断ではなく、実存において、自意識としての「我は我」か、自覚としての「我は、我」か、質を異にする両義性に

揺れており、どのような「我」になるか、当の我に課せられている、そういう我です。そして実は殆どの場合、私たちは多少とも自意識の「我は我」になってしまっていますから、それに気がついて、そのあり方を否定してあらためて自覚的「我は、我」になるという自己転換、自己変革によってほんとうに「人間である」ことが実現します。人間であれば人間だというのではなく、以上のような自己変革を含んだプロセス全体が「人間であること」の実質です。

よく言われる「自己実現」ということも、実際はまさにこういうことです。ところで一人一人において以上のような仕方で「人間であること」が実現するには、殆どの場合、これが人間だなと本当に感じられるような、そういう人間と具体的に出会うこと、そしてその人が自分にとっての模範的人間になり ── その人のあり方から「人間である」ことを具体的に学ぶという出会いと交りによって可能になります。人間は人間から人間であることを学ぶ ── 逆の方向で言えば人間は人間に人間であることを教える、伝える、それによってはじめて「人間であること」が充実します。人間から人間であることを学ぶということ、あるいは人間であることを伝えていくということ。ここに教育ということの根本があります。そして実はそこに既に教育と宗教の結びつきも含まれています。

私は今「宗教」という言葉を使いました。しかし歴史的に成立してきた特定の具体的な宗教、仏教とか、キリスト教とか、そういう個々の宗教のことを直接に考えているわけではありません。これらはすべてそれぞれ教義もあり、一つの宗教共同体としての組織をもって歴史の中で存立してきました。このような実定的な宗教は現実にいろいろな問題を起こしてきます。さっき言いましたように、人間の基礎的な規定である「我は我である」ということが一方、自意識になり、他方、自覚になる。その間に転換がなければならないわけですが、人間のそういう一番基礎の構造が宗教の中にもっとも強烈な仕方で現れてくるということがあります。

人間がゆがむということを言いましたが、宗教も人間の事柄である限り、ゆがむということが実際にあります。そして、宗教がゆがんだ場合にはもっとも大きな害悪を流すということも言えます。宗教戦争の場合のように。しかし、また本当に自意識の「我」から真の自覚に転ずるその自覚の成立、これもまたまさに宗教のことです。ですから宗教そのものがおかしくなる、極端な形では悪魔的になる場合もあれば、本当に宗教的になる場合もあるというように見るべきだと思います。私が今日の話で宗教と言いますのは、具体的に個々の宗教を問題にするのではなく、そういう個々の歴史的な実定的な宗教が成立してくる、その元にはもともと人間のあり方がこうこうであるからこそ、宗教という形態が成立してきたと考えていますので、人間存在の基礎構造のところで宗教成立の所以を見たいと思います。即ち、人間の存在そのものが基礎的に「宗教的」だと考えたいと思います。しかしそう言うと既に「宗教」という言葉を使ってしまっていますから、人間存在の基礎構造の中に宗教と言われる所以のところを見出さなければなりません。

そこで基本的に人間の構造をどのように見るかということですが、現代の哲学、それから哲

学だけでなくて、広く人間諸科学で基本的に認められている人間存在の基礎構造のとらえ方があります。一つはマルティン・ハイデガーの「世界内存在」、もう一つはマルティン・ブーバーの「我と汝」（Ich und Du）という見方です。

ヨーロッパ近代の思想の流れの中で人間の本質をどう見るか、それは長い間デカルトから始まりカントに至って大掛かりに基礎付けられた「我考える」ということに導かれていました。デカルトの「我思う（考える）、故に我あり」というデカルトの言葉をどう解釈するか、これにはいろいろ説がありますが、いずれにしても「我」と言うところに人間の本質があるという考え方がヨーロッパ近代の思想の屋台骨になっていました。

しかし 20 世紀になってからヨーロッパの思想の歴史や社会のあり方の変動との結び付きもあるのですが、「我」を原理にする人間の見方に対して、全く違う原理を打ち出した 2 つの新しい考え方が出されてきて大きな流れになりました。

一つは「我」が基礎ではなくて、「我と汝」。汝と向かい合って我。この「我と汝」という一組が人間存在の原本的な事実であって、人間と人間の「間」、そこに人間の本質がある。これはよく知られているブーバーの考えです。もう一つはハイデガーの「世界内存在」という考えです。人間がこうして存在しているとき先ず「我」として独立に存在して、それから他者と交わったり、ある場所に出ていって物事にかかわったりするのではなくて、最初から、他者と交わり物事とかかわることができるような場所に開かれているのだという、そういう見方です。「我」ということから始まるのではない、はじめから場所のうちには開かれていて、それが人間存在の基礎構造である。そして、場所のうちにあるというあり方の自覚として「我」ということが出る。そういう考え方です。包括的な場所を「世界」として、それで「世界内存在」という術語が出されたわけです。

場所と言いましたが、例えばこの教室も一つの場所です。単なる空間的な場所ではなく、意味を持った場所です。ある特定の意味を持った場所であって、ここではこういうことが行われている、あるいはここではこういうことはできない、そういうことがはっきりあるわけです。意味空間といっていいと思います。人間として存在するということは、最初からある意味空間の中に開かれて意味空間の中で生きているということです。

そして、開かれている限り、「我は我なり」という連続的な直線的な自己同一がそこで切られている。場所へと切り開かれている。そして、その場所から照らされて初めて「我」という自覚が成立します。そのとき、場所に於て共にある人たちとのつながりも我の自覚、自覚としての我のなかに入っています。ブーバーならば、そこで「我と汝」。

以上、我を原理とするあり方に対して、「我と汝」、あるいははじめから場所のうちに開かれて ── 開かれたところでは「我ならず」── 我という「世界内存在」。以上のブーバーとハイデガーの見方に沿って、もう一つつきつめてゆきたいと思います。人間存在の構造から宗教成立の所以が見えてくるでしょう。先ず、ブーバーは「我と汝」ということが真に成立するため

には、「汝」の奥行きとしての「永遠の汝」（宗教の言葉で言えばこれは「神」）との出会いがなければならないとはっきり言います。そうでないと「我」からの強力な一方性によって「汝」も「我」が使う「それ」になってしまうと見ています。次に「場所」に即して見てみます。「場所」を意味空間といいました。例えばここは教室、特定の意味空間です。わたしたちが外に出れば、運動場ならば運動場。あるいはバスに乗って町に帰れば、町。そういうふうに意味空間のつながり、それは並列的につながっている場合もあれば、入れ子型になっている場合もあれば、層になっている場合もあります。そういう意味空間全体のまとまり、包括的な意味空間をハイデガーは「世界」という言葉で示したわけです。私たち人間存在は包括的な意味空間の内にある、それがハイデガーの言う「世界内存在」。

ところで、包括的な意味空間も、意味空間としては意味によって限界づけられた一つのまとまりをもっています。「意味の枠」という言葉がありますね。世界というのは意味の大枠、むしろ「総枠」です。大枠である限り、直接見通すことはできなくても、世界の世界としての性格からしてやはり一つのまとまりを持っています。世界は有限だということです。

私たち人間がそこに開かれていて他者と交わり物事とかかわっている意味空間は、最大にとっても、やはり「意味の総枠」として一つのまとまりを持っていて限りがあるということです。何か分からないように漠然とどこまでも広がっているのではありません。

問題は、世界がまとまりを持っているだけに、まとまりを持った世界という場所が何処にあるかということです。包括的な意味空間、意味の総枠としての有限な世界は、それを超え包んだ限りのない開けの内に、何にもない空間のうちにあると見なければならないと思います。

これはそれだけではちょっと分かりにくいかもしれないので、もう一つ示し方を挙げておきます。世界の性格として、これは哲学での言い方ですが、「意味の地平」という言い方があります。地平線の地平です。私たちは地平線のこちら側にあるものしか見えないわけですね。

地平線のこちら側に或る開けが開かれていて、その開けの中に入ってくるものだけが私たちにとって有るものになります。それも私たちにとって一つのパースペクティブの中にあることになりますから、それぞれの特定の位置をもって、特定の意味をもって現れてくるということになります。世界は「意味の地平」であるということは、地平線の場合と同じように世界の内にあるものだけが、私たちにとって存在するもの、それも意味を持って存在するものになる。それにかかわることができる。こういうことなんですが、この地平というメタファは「世界を超え包む見えない限りない開け」へのいい手引になると思います。

地平というのはどこまでも動きます。わたしが位置を変えれば地平は向こうに下がったり、こっちに来たりします。私と地平との関係は相関的であって、意味の場所は私の位置の動かし方によってさまざまに変わってきます。しかし、どこまで行っても地平線は限られています。ということは、どこまでも地平線の彼方があるということです。彼方のない地平線はないということです。これはあまり自明なことで何でもないようなことに思われますが、それだけに、

見落とされがちな大切な事態だと思います。

あるものは地平のこちら側、私たちの世界の中で特定の意味をもった ── 脈絡のとり方によって意味は変るにしても ── 有るものであるのですが、しかしその地平の彼方があり、どこまでも見えない地平の彼方が奥行きになっているわけですから、本当はなんであるかは分からないということがあります。しかも「分からない」ということが単に否定的なことではなく、積極的に受け止められれば、むしろ逆に無限性へのセンスになります。一本の花であっても、花というだけのものではなくて、無限の奥行きが込められているというセンスから、例えば「この花には神が居給う」というような表現が出て来ます。これは無限性が感じられている表現であって、言葉通りのことではありません。

このように世界のうちにあってある特定のものが私たちに対して特定の意味を持っていると同時に、そういうかかわり方を越えて見えないかなたの奥行きへのセンスまで含めて人と人の交わり、あるいは物事とのかかわりを経験する。そこに私は宗教成立の所以があると思います。あるいは人間存在の原宗教性といってもいいと思います。

ところで地平線のかなたはこちら側と違って見えないところですから、見えないところが見られない、感じられないということが起こり得ます。実は、こちらの方が殆どの場合、私たちの現実になってしまっています。見えるものだけが私たちにとって存在するというあり方がそこに出てきます。世界が世界だけになってしまうということです。しかし、それですむというものではなくて、そこにさまざまなゆがみやひび割れや対立葛藤が生じてきます。それは世界が「我（が）」的世界になってしまうからです。殊に世界をうばい合う集合我と集合我の対立の場になってしまうからです。

ハイデガーがとらえるように人間存在の根本構造を「世界内存在」と見る場合、世界は単に世界であるのではなくて、本当は世界そのものが目に見えない限りない開け（一応「虚空」と言っておきます）に超え包まれているわけです。世界はその真相において虚空／世界です。私たち人間が世界の内にあるということは、虚空の内にある世界の内にあるということです。

主体に沿って言えば、世界の内では「我（われ）」ですが、虚空においては「我なし」ですから、虚空／世界においては「我は、我なくして、我なり」という自覚です。目に見えない地平の彼方を感じず、世界が世界だけになるとき、主体は「我は我なり」という自我になり、世界を「私の世界」として私しようとします。殊に様々な集合体（典型的には民族や国家）の集合「我（が）」どうしの間では対立葛藤がこうじて行きます。歴史の上では悲惨な戦争を繰り返してきました。それはすべて目に見える世界だけが人間の存在の場所となり、しかも、それと連動して「我は我なり」という「我」になって他の「我」とその場所を奪い合うとそういうことになるからです。しかしそれは人間存在の基本の構造からして本当ではないとはっきり言えると考えます。

不手際で、だいぶ時間を過ごしてしまいました。できれば 10 分ぐらい残して質問をいただ

きたいと思いますので、あとは少し飛んで話をしたいと思います。

そういうゆがんだあり方が現在ではある仕方で行くところまで行き着いたというか、そういう感じがします。それは、集合「我」の問題と結びついて、科学技術を産業化しマネー化する社会の加速度的動向によって生活文明の非人間化的性格が益々強まってきているからです。もう少しいろんなことを話してからでないと十分ではないのですが、時間がなくなりますので、現在起こっている事態を示す非常に単純な例をあげてみます。セロテープ。これは現在誰でもよく使うものですが、我々が経験しているように例えばデパートで何か物を買ったりしますと、不必要なほどいたるところにセロテープを貼ります。どうして開けたらいいか分からない程に。包み紙を破くよりしょうがない場合が多いですね。一生懸命はがしてみても、むやみに時間が掛かってしまいますし、結局、最後は破る。何でもないようなことですけれども、これは、本当に恐ろしいなと思った経験があります。何年か前に列車の中でわたしの横に女の子が居たんですけれども、その前の席にいたお母さんがお菓子の袋を渡したんです。それをもらったとたんに、その子はバリッと破いて開けたんです。わたしは本当に恐ろしいと思いました。彼女にとっては破くというのは自明なことなんですね。物事にかかわる自明な仕方。破く以外の仕方はないように、すぐに破ってすぐ開けたのです。昔でしたら物を買ってもきちんと紙で包んで、そしてひもでくくる。そのとき包み方、くくり方というのがありました。しかもこれはある品物を包むというだけのことではないんです。包むとか、くくるということが自分自身の体を通した仕事であり、しかも単なる仕事ではなくて、どこかに芸術に通じるような、その包み方にしても、ひもの結び方にしても、やはり見て美しいとか、そういうことまで同時に問題になり、そういうことまで心掛けるという、そういうあり方だったと思います。それに対して、不必要な程セロテープを貼る、開けるときは無造作にパッと破る。一事が万事です。人間としての質が変わってきてしまっていると思います。

子供たち、若い人が現代生活の中で育ってくるときそのようになってしまっているということがあると思います。何かを心掛けるように教育されるということが殆どなくなってしまっているようです。教育というのは学校に来て初めてするものではありません。生まれたときから既に教育されています。例えばテレビの騒音の中で。現在社会の生活文明そのものが人間を非人間化する傾向を強くもっています。超技術の日常生活化がそれに拍車をかけています。

もう一つ簡単な例をあげてみます。所謂ウォークマンですね。電車の中などで音楽を聞いたり、語学の練習をしています。それだけ取ると非常に便利なものですが自分の周囲に対して無関心にさせます。電車の中で座っている自分の前に老人が立っていても顧慮しないという、そういうあり方を助長するということになるのです。これは、その機械の便利さと有意義性を越えて、人間としてのもっと大きな問題です。

今は必要だからものを作るというだけでなくて、ある新しい技術によって、ある製品が可能になるということになって、作って、今度はそれを使わせるため、買わせるためにむやみにコ

マーシャルを流す。こういう事態はそろそろ限界にきつつあると思います。

人間としての一番基本的なところが全く空洞になりつつあります。一人ひとりの若い人がどうという問題を超えて、現代生活そのものの問題です。それを自覚するということが不可欠だと思います。年間、日本で新車の 500 万台が売れていると言います。それがちょっと売れなくなったら大騒ぎです。何かというと、個人消費が落ち込んだとか、もち直したとか、繰り返されます。人間は買いさえすればいい、それでこの社会は成り立つのだと、そういう雰囲気になってしまっているんですね。これは自明なことではないと思います。

経済が成り立つために、使い捨てにしてどんどん買わせるような現代社会と反対に、人間としてどうあるべきかを考えた、典型的な実例を一つあげてみます。江戸時代の心学 —— これは仏教とか、儒教とか、神道とか、そういうものから編集して人間の道を具体的に示す —— その代表的な一人物で石田梅岩という人が居ましたが、こういう話があります。石田梅岩のところで働いていた下男が、井戸のつるべの縄が古くなったので新しいのに取り替えて、古い縄をポンと捨てたんです。

たまたまそれを見ていた梅岩は下男を呼んで、「そのようにして捨てるのはよくない。井戸のつるべの綱としては使えなくなっても、そのものの命は尽きているわけではない」と。「今度はそれをたき物として風呂に燃やすように」と。「そして、それが灰になったら今度はそれを畑にまきなさい」と、そのように教えたといいます。つまり、一つのものであっても、人間が人間の営みの特定の観点だけで扱うのではなく、そのもの自身の殆ど限りない命の生まれ変わりに添って自分も広大な命にふれるということです。ただ漫然とした気持ちで広大というのではなく、行為を通してリアルに感じられる「宇宙」とか、「天地」と一つに生きるということを人間として大切なことと考え、養ってきたわけです。

そういうあり方、人類が長い間生きてきた生き方の中には本当に学ぶべきことが多いと思うんです。そういうことを全く無視してしまって、とにかく、物を買え、物を買えというふうな、また何でも「自己決定」を優先するような、そういう雰囲気の社会です。

こういうことはどこかおかしい、狂っていると思います。人間として生きるあり方の基本からして狂っていると考えております。どうしてかということですが、わたしたちが人間として生きるあり方を「生命 —— 生 —— いのち」というダイナミックな構造と見て、この構造に狂いが生じているということです。人間として生きるの「生きる」が三つのちがった言葉で表されますが、それは、人間としての自覚の中で「生きる」あり方に質の異った相、ないし次元があり、その間の連関を生きるという複雑な事態があるからです。簡単にいいますと、その「生命」という言葉は今の使い方ですと生命科学というのにもっともはっきり出ています。いきとし生ける、あらゆる生きものに通じて、しかも客観化して見ることができるような —— 例えば遺伝子 ——「生命」です。人間も生き物である限り、そういうレベルの「生命」につながっているわけです。

しかし、人間の場合にはそれだけではありません。遺伝子だけでいいますと人間と、高等のオランウータンとの遺伝子の数の差は本当にわずかだと言われています。ところが人間は飛躍的に違う生き方をしています。直立して手が自由になったということと結びついて文化ないし技術を営む質的に独特な生き方をしています。そして、それは次第に蓄積されて文化の伝統になっています。「生」という一字は特殊に人間的な生をあらわします。元来は哲学上の用法ですが、日本語の「生活」及び「人生」という言葉に含まれています。ところで人間独特の「生」の中に「生活」という言葉で表される事態と、「人生」という言葉で表される事態があって、この二つはニュアンスが違っています。違うのみならず、その意義において大きなギャップがあります。「生活」とは簡単に言えば衣食住ということです。そしてこれは豊かであるということが要請になります。生活というところで見ればすべての生物に通じる生命の創造的進化の最後の頂点に人間的「生」の位置があります。「生活」はどこまでも豊かにということがその意義として出てきます。これは現在猛烈に突っ走っている方向です。それに対して「生」のもう一つの事態である「人生」というのは質的に違う意義をもっています。例えば「たとえ貧しくとも」とはっきり言える意義があります。

「人生」としては、豊かさということはそれだけでは決して意義ではない、価値ではないというところ。喜びや悲しみや運命や罪や愛やの「生」です。「生活」においては死ぬということは単なるマイナスでしかありません。しかし、「人生」の方向では場合によっては「死を賭して」とか、「死を覚悟して」ということが言える意義が生きられます。或いは、「生活」の豊かさに対して、「無一文」でいい、それが人間の本当のあり方ということが言える「生き方」があります。

「貧しくてもいい」とか、「死んでもいい」とか言えるところでは、はっきり否定性が含まれての「生」ですが、その否定性を積極的にふまえて自覚されるとき第三の「いのち」になります（「いのち」とかな書き）。

「いのち」という言葉は日本語では独特のニュアンスを持っています。文学史の上での典型的な例として西行の「年たけてまた越ゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山」をあげることができます。現代ですと、今度の敗戦の後に復員した帰還兵の歌ですが「いのちありて帰還の途次に仰ぎたるあはれ夕暮れの富士を忘れず」。「いのちありて帰還の途次に仰ぎたる……」。「あわれ」は感嘆詞です。戦地から帰ってきて、すぐ隣で多くの戦友が死んでいるわけでしょう。敵もです。たまたま自分は今、生き残って帰ってきたという実感のあらわれのような富士を見る、そこでの「いのち」です。

否定ということが入って初めて本当に人間として生きるということがあるのですが、「いのち」に自覚的に含まれているその否定性を極端な言い方で示した一遍上人の言葉があります。一遍上人は単純に「衣食住は三悪道なり」と言い切っています。これは現在の豊かな生活のセンスからして、また豊かな生活をすることは人権として保障されているというような考えから

すると、奇異に思われるかもしれませんけれども、しかし、その「人権」ということだけで人間のあり方の真実がきめられてくるわけではありません。

「人格」というと、もう違ってきます。更に、人格というだけではなくて、人間の場合には、あの人は風格があるとか、そういう言い方も出てきます。伝統的な言葉では「仏性」とか「神の似像」とかいうところまで含まれています。またこのような「いのち」のところでは、積極的には一木一草も仏であるとか、鳥の声も念仏として聞こえるとか、ヨーロッパの 17 世紀の或る詩人の歌ですが、「わたしが見ているこのバラの中には神が住み給うている」、そういうように言うセンスがはたらいてます。

以上、人間として「生きる」あり方を、「生命 ── 生（生活／人生）── いのち」という動的な連関として示しました。この連関のダイナミズムをもう少し詳しく見る必要があるのですが、不手際でもう時間がありません。ただ、この連関に現在狂いが生じていて危機的な状態になっているということについてだけ一言加えておきたいと思います。

人間的「生」の一局面である「生活（衣食住）」のところだけが現代社会において集合的な自我熱と超技術によって支配される産業経済社会において異常に増殖して、癌化して、「生命」をも破壊するし、それから「いのち」への道もふさいでしまっています。自然破壊、生態系の破壊、環境問題、地球温暖化の問題など「生命」の破壊は見える仕方で大規模に起こっています。見えない「いのち」への道がふさがれていることには殆ど気がつかれていませんが、それだけにより危険な事態です。このままでは人類の破滅も予想される程になっています。しかも社会の勢を現実に変えることは不可能になっています。例えば地球温暖化の問題だけでも、国が自分の国の利害を踏まえて議論をした場合にはどれだけ困難なものがあるかということが分かります。どうなるか。どうするか。結局これではいけないというように自覚した一人ひとりの人間、個人個人が、自分の生活の中で人間としてこうであるべきであるというあり方を実現してゆく、これが出発点になると思います。

どういう結果になるか。本当に大きな力になるかどうか、それは分かりません。しかし何かの道があるとすれば、これが出発点になると思います。

不手際で不十分なことになりましたがこれで終わります。ありがとうございました。

附記。不十分なまま尻切れとんぼで終わった「生命 ── 生 ── いのち」の連関については次の二つの論文を参照していただければ幸である。『上田閑照集』（岩波書店）第十巻 2002年「自己の現象学」所収の「生命／生／いのち」。皇紀夫・山田邦男・松田高志・吉村文男編集『人間であること』（燈影舎 2006年）所収の「人間であること」。

【学術講演の解説】

川　村　覚　昭

本学術講演は、平成 9 年 12 月 10 日（水）に開催した「教職講演会」の講演である。講演の対象は、教職科目担当の教員と教職課程受講生である。時間は、アッセンブリアワーの午後 1 時 15 分から 2 時 45 分までの 90 分を当てた。講演の目的は、教員志望の学生および教職担当の教師に対して教職意識の向上を涵養することにあり、学生に関しては、特に教職を志望するものとして人間はどうあらねばならないかを考えさせるような講演であることを狙った。その意味で、「教職講演会」は、今日、国家的問題になってきている「教員の資質の向上」の問題を先取りするものであった。

講演者の上田閑照先生を紹介すると、先生は、1926（大正 15）年 1 月に東京で生まれられ、1949（昭和 24）年に京都大学文学部哲学科宗教学専攻を卒業したのち、ドイツのマールブルグ大学に留学され、1967 年からは京都大学教育学部教育人間学講座、そして 1977 年からは京都大学文学部宗教学講座の教授を担当され、現在は京都大学名誉教授、日本学士院会員でおられる。1963 年 2 月にはドイツ・マールブルグ大学から哲学博士の学位を、また 1976 年 5 月には京都大学から文学博士の学位を受けられている。先生の研究領域は、宗教哲学、人間存在論、禅仏教、西田哲学、およびエックハルトを中心とするドイツ神秘主義、そして近現代のドイツ哲学である。先生は、現在 81 歳の御高齢ながら、我が国を代表する宗教哲学者の一人として精力的に研究活動をされている。昨年の 6 月には、実存哲学者として世界的に知られるカール・ヤスパースの業績を記念して彼の没後に創設された「カール・ヤスパース賞」の審査員に就任され、ドイツで就任記念講演をされた。著作も多数に上り、岩波書店から『上田閑照集』全 11 巻が出版されている。

今回、掲載した講演は、今から 10 年前のものであるが、現代の人間形成において重要な課題になってきている「教育と宗教」の問題が正面から論じられ、教職志望者の資質向上を狙う教職講演としては、今日聞いても全く色褪せるものではない。

教師は、当然のことながら、人間形成に関るものとして人間に対する深い理解をもたねばならない。それは、教師の人間理解が現実の人間形成を左右すると考えられるからである。「教育と宗教」という問題が、現代日本の教育を考える場合、重要なテーマになってきているのは、今までの人間形成において教師が、戦後社会の極端な近代合理主義の風潮のなかで宗教を全く無視した結果、人間の在り方に本質的な狂いが生じてきたからであるが、教育も宗教も共に人間存在の根本に関る事象であることを考えるなら、人間理解を必要とする教師にとって無視することはもともと出来ないはずである。本講演は、そのことを人間存在の明晰な分析から明らかにしている。

言うまでもなく教師も、一個の人間である。しかし、その「人間であるということ」を教師は本当に自覚しているのであろうか。もし自覚しているとすれば、どこから自覚しているのであろうか。教育は、基本的に人間形成であり、自己形成である。その限り、教育に関る教師は、彼の依拠する形成の基盤が問われることになる。すなわち、如何なる根拠から教育に関るのか、と。それ故、教師は、単なる自意識の枠を超えて、自分を含めた人間の存在全体が見通せる地平にまで自覚を深めねばならないであろう。宗教が、人間存在の根本に関る事象であるのは、この地平と関るからである。本講演では、その地平の構造が、上田先生独自の人間存在論から明らかにされている。そこは、デカルト以来の近代ヨーロッパの哲学のなかで忘却されてきた地平であるが、人間が人間になる、人間が人間である、ということが本当に分かり、言えるためには、無視できない地平であることが語られている。

戦後の我が国は、極端な近代合理主義のもとで経済復興が最優先された結果、一切の価値判断が経済的指標と結びつき、人間の在り方自体が経済的効率で見られるまでになってしまっている。このため教育も基本的に経済的合理主義に左右されてきた。1970 年代の後半からその危険性がしばしば指摘されてきているが、今日の人間形成に歪みがあるとすれば、その原因の一つにそのことが考えられるであろう。それ故、教育が「人間であるということ」を本当に自覚させるものであるならば、教育は、上来説明したように宗教の地平と必然的に結びつくはずである。本講演の醍醐味は、そのことが当時の若い初学の教職志望者にも分かる表現で明かにされ、教育を実践するに当っての視点を彼らに与えたことである。当時の聴衆の一人としてその感動は忘れられない。

今回、10 年の時を隔てて掲載したのは、本講演が、全く活字化されず未発表のものであるとともに、現代の教育と人間の根本的な問題を提起しているだけに、本講演を江湖に供して、その価値を改めて共有したいと考えたからである。教育改革が進行するなかで教育が益々社会問題化し不透明性を増している今日、本講演の上梓が、我が国の教育改革に対して一石を投ずることになればと切に願う次第である。